

# 六花

A white crane stands on a lily pad in a pond at night. The background is a dark blue sky with a full yellow moon and several stars. The crane is white with a long neck and a long beak. The lily pad is a dark purple color. The water in the pond is dark blue. There are some snowflake-like patterns scattered around the scene.

俳句雜誌りつか

2014 (平成26年)

cover design Yuna Mizuno

3

親

大きな石

山田六甲

凍滝と決めて遠目を凝らしをり  
冴返る音湖を搔きむしる  
冬草やもぐら縦横無尽にて  
古草に盛り上げられてゐたる肥  
対岸に札所寺あり滝氷る  
ふはふはと土に浮く足梅探る  
森切れし所に湖の冴返る  
梅林の岩も割れよと冴返る  
梅林へ行かなねばならぬ予定あり  
嚙合はぬ歯もて冴返ると言へり  
湖を横目に雉子の走りけり  
国宝は古色にあらず春隣  
霰降る土すれすれの切株に

神木の切株に雪兔かな  
切り株の虚心坦懐雪解風  
湖へたれも寄らざり梅固く  
つぼむ梅見て來し眼みな黙す  
焼く餅の膨らむごとく蓄梅  
振り出しに戻る思ひぞ雪の梅  
観梅の声みな湖へ流さるる  
けぶりゐる遠くの梅を見て飽かず  
冴返る湖に人声くぐもりぬ  
湖を見てゐて雉子を聞き逃す  
梅開くぽん菓子よりも菓子らしく  
鴨を背になぞりても碑の読めきれず  
鴨去にしみづうみのさぞ深からむ

湖の波だちに鴨帰りけり  
門前によぢれてゐたる春の水  
耕して紅梅の木を離れけり  
子守る子に折返しては耕せる  
梅林へ菜の咲く村を通りけり  
探梅や切り来る風に耳ふさぎ  
巨石あり雁の帰りし田の面に  
引鴨の田面に巨石坐りあり  
人麻呂忌近づいてゐる大<sup>おお</sup>門<sup>と</sup>かな  
底冷えや誰も湖には近づかず  
岩肌を輝かしぬる垂氷かな  
岩肌に食ひ込みぬたる垂氷かな  
雪間より大すず白を抜き出しぬ

# 年賀客去んで手玉のこぼれ豆

田尻 勝子

まづはまづおとがひ細りにお年玉

立ち迫る路一杯の落葉かな

気霜吐く犬全霊で訪へり

君の咳天上天下に燃え盛る

年賀客去んで手玉のこぼれ豆

ねんがきやくいんででだまのこぼれまめ たじりかつこ

俳句における意外性と特殊性はちがうのだけれど、私は意外性を重んじる。それに照らせばこの作品は特殊性も含んでいる。にぎやかに遊んで帰った年賀客（子孫）の残して行った物（こぼれ豆）。賀客のいなくなつた寂しさをお手玉からこぼれた豆に言わせた意外性もあり、久しぶりにカツチヤンのホームランが出た！と拍手したいのである。お手玉の縫い目がほころびて豆がこぼれ出したことにも気がつかず夢中になつて遊んだ熱気なども想像できる。なおかつ賀客が帰って行った後の畳にぼつんと残された豆粒を拾い上げながら何とも言えぬ寂寥感がこみ上げてくる。その寂しさを物に語らせているからいいのだ。

# 漣の中に白鳥入りにけり

住田千代子

漣の中に白鳥入りにけり

黄落の行くあてもなく吹かれぬし

冬風の漁船に網を繕へる

笹鳴きの藪に響ける羽音かな

日時計の影ふくらめる小春かな

さざなみのなかにはくちよういりにけり すみだちよこ

白鳥は水鳥の王者。そう思わせる霊的なエネルギーを持っている。白く優雅なその白鳥が逆光のさざなみに泳いで入ったのだ。その瞬間白鳥は爆発的な光となって姿を消した。幻想的で霊的な瞬間を現じたのである。作者は眩しいそのシーンに神々しささえ感じていいる。「白鳥の神瑞」といい、お言葉のでなかつた垂仁天皇の第一皇子である本牟智和氣御子命が白鳥が高く天を飛ぶのを見てお言葉が発せられるようになったという話が記紀に見える。

また大神ゼウスが白鳥に化けた姿でスパルタ王妃レダに恋し、白鳥に化けて接近したというギリシャ神話をも連想させる。漣はレダ（レーダ）の象徴かもしれぬ。

雪 卿 集

湖

市川伊團次

湖の水面緑に秋の風  
寒風や皺の我が手に息を吹く  
勝ち続くもうよれよれの相撲草  
相撲草相撲取らずに枯れてをり  
雄ひじわの茎雄ひじわに切られけり

夢の中

貝森光洋

隙間風夢の中まで入り来る  
隙間風家の中ほど厳しくて  
雪しまき越えれば明日の見える来る  
大寒のまつただ中に置き去りに  
女正月うつらうつらの男たち

雪 卿 集

年の湯

笹村政子

年の湯の息づきながら流れけり  
右ひだり荒を移して掃き納む  
二度三度吹きて雑炊渡しけり  
段ボール潰すバイトや年の暮  
池の荻立ち直りては穂を散らす

ブーメラン

松本文一郎

吹けば掃き掃けば吹きたる秋の風  
冬麗や利き手で掴むブーメラン  
青頸の肉屋の軒に吊られをり  
親と子の絆の強さ鴨の陣  
冬構灯せど暗き三和土かな



せつ じゆ しゆう  
雪 樹 集

冬夕焼

出口

誠

街灯のつきしままなり冬の雲  
犬の死も受け入れてをり冬の山  
山々を真つ黒にして冬夕焼  
迫る雲敵とはせず寒の月  
どたどたと少年帰りきし寒夜

寒雷

藤生不二男

触れし手の冷たさ言うて笑まひけり  
寒雷の止まぬがままに明けにけり  
寒林や一鳥の声矢のごとし  
凧の裾にまつはる枯葉かな  
隠沼の鳩にしぐれて來りけり

# 蛍雪譚

六甲選

二十六年三月号選後に

## 湖の水面緑に秋の風

市川伊團次

市川伊團次さんは今回、この句から題を「湖」にした。題というのは書き手のもっとも腐心するところだ、小説の新人賞でも、選者が小説の題に触れていることが多い。また歌詞の場合もそうだし、洋画も同じ。伊團次さんの今回の作品を見て読者はどのような題をつきたいと思うだろうか。六甲は何でも思いつき人間だから「緑の秋」や「もうよれよれ」とか「枯相撲」「こふう」とか出鱈目な題を付けたくなる。

さてこの句、秋になると湖の周りは色つきはじめて、暖色になってくる。その彩りの中に水面が碧玉のような色していると「色変えぬ松」のように色の対比で一段と美しく感じるのだろう。そこへその美しさに風を吹かせる創作を試みたとも考えられる。碧玉に風が吹き、漣が立つと読者の目の前に緑色が出現する。その場面を想定して頭の中で絵の具を混ぜ合わせているのだ。シジンやハイジン、ゲイジツカの見る湖はパレットだ。実際に秋風が吹いているのを見て作った句だとしても鑑賞する私は伊團次さんの頭の中の秋風にまで

入り込んでみたくなるのである。唇がさむなってきた。

### 寒風や皺の我が手に息を吹く

泣きの十六／短い指に／息を吹きかけ／越えて来た  
というサブちゃんの歌がすぐに出てくるくらい、こ  
うフリーズは六甲好み。掲句の場合は短い指でなく  
皺の手。十六歳の四倍の歳を数えた働く手なのである。  
寒風に干切れそうな手に息を吹きかけて少しでも悴む  
のを防ごうとする。その仕草は寒さの象徴。その上背  
を丸めたら完璧真冬の姿になる。「もうこの場を離れ  
て部屋に入りストーブに暖まりたい」と思う。限界が  
近づいてきたのだ。でもそれは仕事の場合。遊びだつ  
たら、凍え死んでもいい、とその場を離れない。とこ  
ろで遊ぶときにはどうして寒くても我慢が出来るのだ  
ろう。いやいや遊ぶということは命がけでやらないと  
面白くない。冬山をやる男や植村直己さんのように死  
ぬまで冒険を追求した人もいる。冬山登山をやる山男  
の手足の指はほとんどの人が凍傷で無くしている。そ  
れでも山を止めないのだ。六甲なんぞは車で冬の六甲  
山に登る程度だから威張れないわ。

そうそう皺のことを言うのを忘れていた。仕事をし  
ていると白魚のような手が寒風にさらされて若くても  
皺の深いガサガサの手になるのだ。息を吹きかけても  
どうにもならないのは解ついてもそうするのであ  
る。(以下略)



# 六花集

夕紅も幾黒水  
 暮葉み重々々鏡  
 のづにと山  
 畦るも雨の  
 にや伸粒紅  
 上実びふ葉  
 げ習しの電と  
 ら巫線鷓棗大  
 る女鷓棗の鳥  
 蓮声鷓棗の鳥  
 根弾猛の鳥  
 舟みる実居

読初の城極  
 み夢ん壁月  
 初やびにの  
 め会りと精葉  
 のひと根書  
 持ちたき尽  
 ち重人のチン  
 りのあチン  
 するは電車  
 文はゆく枯  
 庫はれ師  
 本ず走るに

日笛冬黄漣  
 時鳴風落の  
 計きのの行  
 の影の漁く  
 ふに藪船あ  
 く響に船て  
 らける網も  
 る羽をなく  
 小音繕吹  
 春かへか  
 かなるしり

廣畑育子

平居濤子

住田千代子